

世界神話学：比較神話学の現状と展望

松村 一男

はじめに

神話研究にはいくつかのやり方があり、それらは必ずしも相互に排除・否定しあうものではない (Vries 1961; Doty 2004; 松村 1999; Segal 2004; Ellwood 2008)。ところが、現在、これまでにはなかったタイプの新しい比較神話研究が行なわれつつある。残念ながら、その手法に沿った研究をするだけの蓄積が今の私にはまだない。従って現状では、それについて紹介を行なうことが私に出来る最も学術的な貢献だろう。

まず、このタイプの新しい比較神話研究を知ることになった個人的な体験から述べていく。2005年3月に東京で開催された第19回国際宗教学宗教史学会議世界大会において、ハーヴァード大学のサンスクリットおよびインド学教授であるマイケル・ヴィツェル氏と知り合いになり、比較神話学国際会議への参加を勧められた¹⁾。それ以降、まず2006年5月10日から13日にかけて、中国の北京大学において開催された Harvard & Peking University International Conference of Comparative Mythology (比較神話学国際会議) に参加した。ついで2007年8月28日から30日にかけては、スコットランドのエジンバラ大学において、The Deep History of Stories と題するカンフェレンスに参加した。2008年春には国際比較神話学会 (International Association for Comparative Mythology, IACM) が正式に設立された。そして2008年8月19日か

ら21日にかけては、オランダのラーフェンシュタインにおけるカンフェレンスに参加した(Second Annual Conference)。そして2009年の5月23、24日には第三回国際比較神話学会議(The Third International Conference on Comparative Mythology)が國學院大学において開催された(<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/IACM/index.htm>)。

こうして四年にわたって比較神話学のカンフェレンスに参加し、自分でも発表者、司会、討論参加者(discussant)を務めていながら、目の前で繰り広げられていた新しい研究の動向を必ずしも十分に理解できていなかったと認めざるを得ない。その理由はいくつかある。一つにはさまざまなタイプの発表があり、これから述べていく重要な一連の研究のつながりが見えにくかったこと。第二には、デュメジルのインド・ヨーロッパ語族比較神話研究についても複数の興味深い発表があり、これまでの自分の研究との関わりでそちらの方により関心が向いていたこと(松村2008)。そして第三には、日程の割に発表者が多く、個別の発表と討論に十分な時間がなかったこと、である。あらかじめペーパーが提出されていて、事前に読んでいれば、短い時間内でも有意義な討論が出来ただろうが、それは2008年になるまで実現しなかった。2008年度は主催者の強い要望によってほとんどのペーパーが事前に提出され、カンフェレンス以前にネット上で公開されたので、それまでとは異なり、かなり実質的な討議が可能となった。また事前のアブストラクト段階で発表者の数とテーマを限定したことも、討論の水準を高めるのに大きな効果があった(松村2009a)。

こうした結果、以下の四人の研究者のアプローチは相違点もあるが、全体の方向性として新しい比較神話学と呼ぶにふさわしいと考えるに至った。その四人とは先述のヴィツェル、神経生物学を中心として文化起源を考える文化史家スティーヴ・ファーマー、オランダのライデン大学のアメリカ民族学の教授であるヴィム・ファン・ビンスベルゲン、そしてロシアのサンクト・ペテルブルグの人類学・民族学博物館(Kunstkamera)のア

メリカ部門の主任・教授であるユーリ・ベレツィン（ロシア語読みではベリョースキン）である。

まず彼らの手法の前提となる遺伝子学、化石記録、気候学などに基づく人類史の再建図をオッペンハイマーの著作に依拠しながら紹介しておく（オッペンハイマー 2007。以下では同書については該当ページ数のみを記す）。オッペンハイマーも 2007 年のエジンバラでのカンフェレンスに参加しており、彼がまとめた他の学問分野での現生人類の移動についての考え方が四人に共有されていることがうかがえた。そして紹介に次いで、四人の理論を共通点と相違点に留意しながら紹介する。そして最後に、こうした比較神話学の流れが形成されてきた背景について考察を行なう。

『人類の足跡』

オッペンハイマーの著作では遺伝子学や気候学、絶滅した各種の類人猿から現生人類までについての古生物学・形質人類学など幅広い領域の成果が論じられているが、ここではそのうち、新しい比較神話研究が生まれてきた理由を理解するための背景として必要な情報に限定して紹介しておく。

DNA（デオキシリボ核酸）のうちには組み換えが起こらない二つの小さな部分がある。そのうちのミトコンドリア DNA（mtDNA）は母親からのみ伝えられ、もう一つの Y 染色体（NRY）は父親からのみ伝えられることが、遺伝子学によって明らかにされている。この二種類の遺伝子は混ざり合うことなく次世代へと変化することなく受け継がれるため、これらを用いて先祖をさかのぼり、母方と父方の系統樹を作ることができる（p.16, 57-58）。

ミトコンドリア DNA をさかのぼると 19 万年前のアフリカのたった一つの系統にたどりつくことが分かった。これは「イヴの遺伝子」と呼ば

れる (p.59)。さらに千世代につき一つの割合でミトコンドリア DNA に「点突然変異」が起こることがわかった。これによってイヴの遺伝子以降の母系遺伝子系統樹が作られるようになった。約 8.3 万年以降にアフリカ人には見られない突然変異が非アフリカ人の遺伝子に認められるようになる (p.59-61)。つまり現生人類はアフリカで進化し、そのうちのある一部が 8 万年前以降にアフリカを出たのである。

こうした研究の結果、アフリカ以外に住む現生人類はすべて 10 万年前以降にアフリカから移動してきた者たちの子孫であることが明らかになった。現生人類の大きな出アフリカはただ一度だけであり、男系、女系の系統ともただ一つの共通の遺伝子上の祖先をもち、それぞれが非アフリカ世界のすべての父と母となったというのである。これは「出アフリカ説」(Out of Africa Hypothesis) と呼ばれる (p.18)。この結果、旧石器時代の洞窟においてヨーロッパ人の祖先が最初に絵を描き、宗教を発見し、人類文化を作り上げたというヨーロッパ人・白人優位の旧来のシナリオも崩れ去った (p.19)。

ではなぜ特定の時期にしかも一度だけ出アフリカが起こったのだろうか。その理由は気候学によって説明される。過去 200 万年のほとんどは更新世の氷期であった。最大間氷期と呼ばれる特別に温暖な時期が 12.5 万年前にあり、サハラ砂漠が草原となって、南からの人々が獲物を追って北上できた。そしてこの時期に一度、アフリカからシナイ半島を経由する北ルートでの出アフリカが行なわれたことがわかっている。しかし、9 万年前に激しい氷結と乾燥化があり、レバント地方まで進出した現生人類は絶滅してしまった (p.73-76)。

この北ルートの他に、ユーラシアに移住するもう一つの南ルートがある。これは紅海の南端の幅 25 キロ、深さ 137 メートルの現在はバブ・エル・マンデブ (悲しみの門) と呼ばれている海峡である。こちらは間氷期に開く北ルートと対照的に氷河期に海面が凍結することで開かれるルー

トである。氷河期には砂漠化が進行するので、食料としての貝や海洋生物の比重が増大する。そしてより湿潤なモンスーン気候地域への移動が海岸採集民にとってより好ましくなったはずである。この結果 8.5 万年前、現生人類は「悲しみの門」を通過してアラビア半島南部、現在のイエメンに到り、さらに海岸線に沿ってインド南部から東南アジア、パプア・ニューギニア、オーストラリア、中国、日本へとモンスーン地帯の海岸地域を移動していったと考えられる（乾燥と海面低下のため、ペルシア湾やマラッカ海峡はない。インドネシアは東南アジアと陸続き。パプア・ニューギニアとオーストラリアも一体。日本も韓半島やカラフトで大陸とつながっていた）。なお、北アフリカから中東、ユーラシア内部の地域は氷河期にはすべて砂漠となっていたので、南ルートから出アフリカをした現生人類が北上することはなかった（p.90-104）。

マレー半島への到着は 7.4 万年前、オーストラリア到着は 7 万年前と考えられている（p.198）。

5 万年前に亜間氷期があり、南アジアとトルコとの間の砂漠に草原が開けた。現生人類はこの時期に現在のインド・パキスタン南部からザグロス山脈の南を通過してレバント、トルコ、ヨーロッパへと進出していった（p.108-111）。

出アフリカをした女系一族の祖先 L3（「出アフリカ・イヴ」）からは二人の娘 N と M が生まれ、彼女たちが非アフリカ世界の現生人類すべての母となったのだが、M の子孫の M1 と N の子孫 U6 についてはアフリカに戻ったことが分かっている。U6 は 3 万年前にレバントから北アフリカに戻った。北アフリカのベルベル人の系統はヨーロッパとレバントの遺伝子系統が後代に南下してきたものである。M1 は最終最大氷期（LGM, Last Glacial Maximum）と呼ばれる最後の氷河期のころ（2 万年から 1 万年前の間）に紅海を越えてエチオピアに戻っている（p.85, 106）。

気候学、遺伝子学は現生人類の移動についての上記のような図式のう

ち、出アフリカやその後の拡散の年代や経路については完全な合意にはまだ至っておらず、異論もある (Wade 2006、サイクス 2006a、サイクス 2006b、海部 2005、リレスフォード 2005、ストリンガーとマッキー 2001 など参照)。しかしそれでも出アフリカという全体的な構図については一致している。アフリカで誕生した現生人類の祖先が基本的に今の私たちと変わらない以上、彼らが出アフリカ以前から神話を持っていた可能性や、現生人類は出アフリカ以降も共通の神話を保持しつづけたという可能性は充分にあるだろう。それがどのようなものであったのかを再建しようとするのが「世界神話」(World Mythology)である。もちろん、その後の環境の変化や生産様式の変化によって旧来の神話に変化し、新しいタイプの神話が生まれた(農耕起源の神話)ことは当然考えられるから、そうした側面について考慮する必要があるだろう。またどのようにして世界神話を再建していくのかという方法論的な問題がある。文字の発明と神話のテキスト化はもっとも古くても今から 5000 年前だし、多くの無文字社会の神話がテキスト化されたのは百数十年ほど前からのことだからだ。

この問題点の解決についてはいくつかの可能性が考えられ、それらを組み合わせることでさらに可能性が高まると考えられる。一つは神話タイプの分析である。世界中の神話にかなり多く見られる神話タイプは現生人類出現時までさかのぼる可能性がある。もちろん、これをできるだけ客観的・科学的にするためにはデータの蓄積とそれに基づくテーマ別の詳細な分布図の作成が必要である。第二にはオーストラリアに人類が到達したのはレバントやヨーロッパよりも古いということの持つ意味を考えたい。オーストラリアとアフリカに共通して見られる神話タイプはかなり古いと考えてよいのではないか。第三は神話連続である。神話タイプはそれぞれ孤立して伝承されてきたと考えるべきだろうか。むしろ一連の意味あるまとまり、神話連続として伝承されてきた可能性が高いだろう。個別神話ではなく神話連続として比較する方がより系統的な関係が確実になると思わ

れる。こうした点に留意しつつ、以下では四人の研究法を紹介していく。

ヴィツェル

大きな展望による世界神話学 (World Mythology) の理論的前提は、「比較と再建：言語と神話学」という論文においてパン・ガイア (Pan-Gaeon) 神話と出アフリカ (Out-of-Africa) 神話と Gondwana (Gondwana) 神話とローラシア (Laurasian) 神話という区別として示され (Witzel 2000-2001)、後により精緻化された (Witzel 2005b)。ヴィツェルはアフリカで誕生した現生人類が保持していたと考えられる最古の神話をパン・ガイア神話と呼び、紅海を渡ってアフリカを出て、アラビア半島からインドに到着した段階で現生人類が保持していたと考えられる神話を出アフリカ神話と呼び、その中から比較的早い時期にユーラシアの沿岸を移動してパプア・ニューギニアやオーストラリアに到達した人類が、現在のサハラ以南のアフリカの神話と共通して示す特徴的な神話タイプを Gondwana 神話と呼び、インドから東に向かって東南アジア、中国、日本、シベリア、北米、中米、南米に向かう流れや、インドからユーラシア内陸に向かう流れ、そしてインドから西に向かってレバント、ヨーロッパそして一部は北アフリカにも向かった流れに共通する神話群をローラシア神話と呼んでいる。

Gondwana 神話とローラシア神話は、旧タイプ神話と新タイプ神話とか、南地域神話と北地域神話とか、アフロ・オーストラリア神話とユーラシア神話という名称による区別でも構わないと思われるが、ヴィツェルはインド、オーストラリア、アフリカ、南米、南極大陸などが含まれていた仮説上の超大陸の名称 Gondwana を古い群に用い、新しい群には今の北米大陸とユーラシアからなる仮説上の超大陸ローラシア大陸の名称を用いている。

ヴィツェルによればゴンドワナ神話の特徴は、I 創造神話の欠如（すでに存在する世界に人類が出現するという形が一般的）、II 洪水神話の欠如（ただし、サハラ以南のアフリカにもオーストラリアにも洪水神話があることが確認され、Witzel 2001 での洪水神話の欠如という特徴づけは訂正された。Witzel 2005b; Witzel 2008 参照）、III 女性呪術師の欠如、であるという。

これに対してローラシア神話では、I 宇宙と世界の起源、II 神々の系譜、III 半神的英雄の時代、IV 人類の出現、V 王の系譜の起源、VI 世界の暴力的な終末（と場合によってはそこから復活）という共通する一連の神話連続が認められるという。また彼は、この神話群において、宇宙は人体に似た生物と捉えられており、原初の近親相姦から誕生し、成長し、年老い、朽ちて滅亡すると考えられていたとも主張している。こちらに属するものとしてはウラル、アルタイ、日本、インド・ヨーロッパ、オーストリック（東南アジアとポリネシア）、古代エジプト、メソポタミア、中国、アメリカ先住民（アタバスカン、ナバホ、アルゴンキン、アステカ、マヤ、インカ、アマゾン、ティエラデルフエゴ）の神話が挙げられている（Witzel 2005b: p.287）。

ヴィツェルのアプローチの特徴の一つは、個別のモチーフではなく神話連続（narrational scheme, whole system of myths）を比較しようとしている点だろう。神話が語られ、伝えられてきたかのかといえ、それは語ることによって一体感を生み、そしておそらくそれを伝える理解するために儀礼行動が伴い、そうした活動が社会性を促進し、さらには言語発達を促したとも考えられる。とすれば、神話は本来的に体系をなしていたと考えられる。世界の誕生、神々の出現、人間、英雄の登場、文化の起源、そして世界の衰退と滅亡さらには再生、こうした要素すべてが整っていることは絶対条件ではないが、少なくともなぜ神話が存在してきたかを考えるならば、そうした神話連続を想定することはむしろ必要だとするのであ

る。換言すれば、個別モチーフの比較も重要だが、それ以上に神話モチーフの連続の比較が系統性を明らかにするには有効と考えるのである。この点をヴィツェルは文献学者らしく、単語や格変化よりも文法全体を比較する方が有効だろうと喩えている（Witzel 2005b: p.286. なお、個別の文献や参照箇所は挙げないが、こうした考え方はヴィツェルと世界神話の構想を共有しているファーマー、ファン・ビンスベルゲンなどの議論でも前提とされている）。

同様に、神話が単独で存在すると考えるよりも、儀礼を伴って存在してきたと想定するほうが合理的・合目的だろうとも主張している（この点は賛成できる。こうした場合、歴史時代・文字社会の神話から例外を持ち出してくるタイプの反論が必ずなされるが、研究の大きな方向性をいくつかの個別例によって全面的に否定しようとするような（非）学問的態度には無意味さを感じる）。ヴィツェルは神話と対応する儀礼がある場合には、そうしたペアを他地域の類似のペアと比較することで一層系統的な関連である可能性が説得的に示しうると考える。その場合に特徴的なのは、語派による区別が場合によっては無視されている点である。これは彼が文献学者・言語学者であることからすれば奇妙かも知れない。しかし、彼の考えでは神話体系は歴史的に知られている個別語派が成立する以前にすでに存在していたのだから、語派を超えようとしないう比較（たとえばデュメジルのインド・ヨーロッパ語族神話研究）の方がむしろ比較研究の可能性を自らの手で狭めているということになる。もちろんその水準での比較研究はありうるし、比較としての精度がより高いのも事実だが、しかし、類型論（typology）としてではない、系統論としての語派を超えた比較研究もまた真剣に検討されるべきと「世界神話学」では考えられているのである。

こうした考え方に基づいてヴィツェルは、たとえば同じローラシア神話群に属するインドのヴェーダにおける神話と王権儀礼を日本の記紀における神話と王権儀礼と比較する。そしてその比較はインドと日本に留まら

ず、同じローレシア神話群に属すると彼が考える北米、中米、南米の神話にまで広がっていく (Witzel 2005a; Witzel 2007)。

ローラシア神話の天地創造に特徴的なテーマとしてヴィツェルは、1. 混沌、2. 原初の水、3. 潜水神話と漂える大地、4. 世界巨人、5. 世界雄牛、6. 宇宙卵を挙げている。1. 混沌のテーマは、インド、ギリシア、ゲルマン、ポリネシア (マオリ、ハワイ、タヒチ) に見られ、2. 原初の水のテーマは、北ヨーロッパ、シベリア (ツングース、アイヌ)、南中央北アメリカ (オマハ、カリフォルニアのマイドゥ族、アステカ、チブチャ)、オリエント (エジプト、メソポタミア)、インド、東南アジア (タイ)、中国、オセアニアに見られ、3. 潜水神話と漂える大地のテーマはインド、シベリア (ツングース)、日本、インドネシア、ポリネシア、北アメリカ (オマハ)、南アメリカに見られ、4. 世界巨人のテーマは、ゲルマン、インド、中国、ギリシア、メソポタミア、ローマ、中国南部、ボルネオ、フィリピンなどに見られ、5. 世界雄牛のテーマは、ゲルマン、ケルト、インドに見られ、6. 宇宙卵のテーマは、インド、ギリシア、フィンランド、インドネシア、ハワイ、ニュージーランドに見られる (Witzel 2005b: pp. 290-306)。

ヴィツェルはここには一貫した論理的展開が認められるとする。混沌／暗黒から原初の水、そして潜水神話と漂える島、生命の誕生の契機としての宇宙卵、世界を構成する要素を提供する世界巨人や世界雄牛という順序での展開である。そして世界が成立した後には天と大地が出現し、神々や英雄の時代となり、文化の出現が語られるのである (p.306)。

この6つの天地創造に特徴的な神話テーマは地域によってばらつきがあるが、ただし6つのすべてがインドには見られることは重要な意味をもつとヴィツェルは考える。なぜならオッペンハイマーの現生人類の移動の歴史の再建案によれば、出アフリカをした人類がのちにローラシア神話を共有することになるグループとしてしばらく滞在したのがインドだと考

えられるからである (p.311)。「ワラと岩戸」(Witzel 2005a)において、インドの神話、儀礼を基点として語派の壁を越えて日本、北米、中米、南米へと神話、儀礼の比較が広がっていくことの妥当性はこうした形で示されているのである。

Gondwana神話とローラシア神話の分類を行なった後で、ヴィツェルはパン・ガイア神話には世界巨人、洪水神話などのテーマはすでにあり、また出アフリカ神話にも潜水神話のテーマがあったが、それらはローラシア神話の段階になって一連の物語の中に組み込まれたのであろうと考えている。文化の発展とともに神話もより体系的になるとヴィツェルは考える。今から4万年前のインドにおいて、それまでに神話テーマを取り込みつつローラシア神話の基礎となる神話連続が作られ、神話の体系化がなされたと考えるのである。これは当時そこにいた現生人類に受容され、彼らが各地に移動していった結果、広がって、地域ごとにさらに独特の様式を持つようになったのだろう。Gondwana神話の担い手の集団はすでにインドの地を離れていたので、このローラシア神話の誕生を知らなかった (Witzel 2005b: pp.312-313)。

ファーマー

ファーマーはヴィツェルの考え方に共感しつつも、その方法論では不確実性を排除しきれないと批判している。環境変化や技術的革新によって似たような状況下で似たような神話が相互に無関係のまま生じる可能性をどうやってチェックできるのか、つまりそれぞれの神話テーマの古さをどのように判断できるのかという疑問である (Farmer 2008: p.4)。

この問題の解決に向けて、ファーマーは神経生理学からのアプローチを試みている。現生人類の脳は言語使用や顔の認識、表情やしぐさから相手の感情や意図(性的シグナルなど)を読み解くことなど、高度の社

会性を保持する「社会的脳」social brain となっている (Farmer 2008: p.5)。ファーマーは、この脳の発達には副産物があり、それは人間以外の生物、さらには無生物までを含んだ世界のあらゆる事象を人格化 (anthropomorphize) してしまう傾向で、神話はそれによって生まれると主張する。外的世界の過度の人格化・人間化によって神話の世界では天体や動物や植物などあらゆるものが人間のように話し、考え、さらには人間と夫婦関係さえ結ぶ。目に見えない力も人間的な神の姿を取ることが多い (Farmer 2008: pp.8-9, 17)。

では世界中の神話が似ている要素はあるけれど、完全に一致しないのはなぜだろうか。この点をファーマーは「社会的脳」は人類に普遍だが、それは脳の特定部分に特定されるものではなく各部が連動しており、しかも階層化されていて、基本的な下位の構造は成長過程において外部の刺激を取り込みつつ、より上位の構造を形成していくものであり、柔軟性に富んでいて、成長過程において完成すると考える。したがって環境や状況によって与えられる社会的情報が異なるならば、異なる反応を生み出すものであり、神話にも文化的刻印という形で違いが生じるというのである (Farmer 2006: p.69; Farmer 2008: pp.20, 23)。

他の類人猿が消滅し、現生人類だけが生き残った背景には高度の集団的結束を可能にする社会的脳の発達があったらしい。それには言語の発達が大きな役割を果たした。しかしそれはまた言語によって自集団の結束を固めて他集団とは区別すること、他集団とは異なる独自の言語と言語文化をもつことも生み出した。生き残るためにはウソをつく能力も求められた。わけてもトリックや英知によって新しいものを生み出したり、勝利したり、獲得したりするトリックスターや文化英雄の神話は、社会的脳の副産物としての神話という見方を裏付ける。そしてそうしたタイプの神話は、各種の神話の中で最も古層に由来するものと考えられる (Farmer 2006: pp.73-74; Farmer 2008: p.25)。つまり、神経生理学から古層の神話モチー

フと推定されるものについては、独立発生の可能性を考えなくてよいという見通しが得られるというのである（もちろん、独立発生の可能性は依然としてあるが、その意味を無視できることになる）。

なお、もしファーマーの考え方が正しければ、神話の発生は 20 万年以上前となる（Farmer 2008: p.25）。つまり、旧石器時代よりはるかに古いし、それはアフリカでのこととなる。さらにこの考えは神話の起源のみならず、宗教そして神観念の起源とも関連してくる。

ファン・ビンスベルゲン

ファン・ビンスベルゲンはザンビアのンコヤ族（Nkoya）を 1972 年以來フィールドとしてきた。ンコヤ族は現在の人口約 10 万、バンツ系言語をもつ（van Binsbergen 2008: p.1）。彼はアフリカ学の伝統に沿って、無文字社会の伝承から歴史を再構成してきたが（van Binsbergen 1992）、1990 年代の前半にアッシリアやエジプトの神話伝承そして比較神話学を知ると、むしろアフリカと世界各地の神話の共通性はそれらの神話が共通の源泉に由来すると考えるようになった（van Binsbergen 2008: pp.4-5）。ファン・ビンスベルゲンはヴィツェルの Gondwana 神話とローラシア神話の大別には反対している。その特徴づけが北の先進地域の完成されたローラシア型と南の後進地域の不完全な Gondwana 型というものであり、学者の無意識の価値判断の産物だし、「世界神話」を考えるにはかえって妨げとなるモデル化だというのである（2008: p.8; Van Binsbergen, with Isaak 2007）。

前出は van
ですか？

ファン・ビンスベルゲンはンコヤ族の神話や儀礼を紹介し、対応する他地域の神話や儀礼と比較する。ンコヤの神話ではハチ女王が建国したとされ、王室の儀式では蜂蜜酒が重要となっている。またその結果、養蜂も重要とされ、野生のハチのために樹木にカヤツリグサを編んで作った筒が吊

り下げられた。また彼らの神話では、始祖は男女の双子で、男はカテテ「葦の人」、女はルハンバ「枝から枝を渡る王家の人」という名だった。最初、カテテは葦のマットに、ルハンバは編んだ筒に隠れていたが、近親相姦で交わって子孫を儲けたとされる。それぞれは葦のマットと養蜂の筒と結びつけられている。ハチや蜂蜜（酒）の王権とのつながりは世界各地に見られるが、ファン・ピンスベルゲンはこの王権神話がとくにエジプトの場合と一致する点を重視する。エジプト王の称号は *nsw-bit* 「葦とハチの者」だからである (pp.11-13)。葦はンコヤの王即位に必須だが、エジプトやメソポタミアや旧約聖書においても重要である（エジプト王の称号。洪水神話において、葦（屋）を通して神（々）が洪水を知らせ、葦屋を船として洪水を逃れること。出エジプトで葦の海を渡り救われる）。この点から、ンコヤの王権神話や儀礼が後の時代の他地域から伝播によって成立したのでなければ（その可能性は低い）、他地域と共通の古い神話にさかのぼると考えられる。ファン・ピンスベルゲンはこうしてンコヤの神話や儀礼において重要な神話や儀礼のテーマを次々と他地域の神話や儀礼と比較していき、その共通性を示そうとする。

ベレツイン

ベレツインは「世界神話と民話：モチーフのテーマ別分類ならびに地域分布。注解つきカタログ」(World mythology and folklore: thematic classification and areal distribution of motifs. Analytical catalogue) を作成し、そこにおいては、それに基づいて神話の分布、伝播を考えている。このカタログは 5000 以上の書籍と学術雑誌論文から作成され、1400 ほど以上の神話モチーフが分類され、地域ごとの分布地図としても示されている (<http://www.ruthenia.ru/folklore/berezkin/eng> で見ることが出来る)。なお、日月神話についてのみだが、松村 2009b において詳しい内容紹介

を行なっている)。彼は世界神話をインド・パシフィック (Indo-Pacific, IP) とユーラシア大陸 (Continental Eurasian, CE) という二つの大きな群に分類している。彼によれば、1400 ほどの神話モチーフのすべてではなく、宇宙論や起源譚に関する 600 ほどに限定するとその対比が明瞭になるという。ユーラシア大陸群には北米が含まれ、星図や月の影のかたちとの結びつきが特徴的である。これに対して、インド・パシフィック群にはアマゾンやメラネシアが含まれ、人体の生理学的、解剖学的な考え方に共通性が認められるという。ところがサハラ以南アフリカの神話には星の神話も「解剖学・生理学」モチーフも乏しい。つまり現生人類が出アフリカをした時期には神話はまだ十分に発達しておらず、その後の氷河期に二つの大きな集団が枝分かれした後に個別の発展を遂げた可能性が考えられるのである (Berezkin 2007)。ベレツインの神話分布図とそこから推定される特徴的なグループやそうしたグループ形成の過程の推測は、ヴィツェルのものと似通っていて興味深い。最大の違いは、ヴィツェルではアフリカは Gondwana 神話群に含まれ、ベレツインの場合にはアフリカは二大神話群とは別個に位置づけられている点だろう。

ベレツインの見方にしたがうなら、そして「世界神話学」の理論全体の基礎をなしている現生人類の出アフリカの移動経路を考慮するなら (上記 オッペンハイマー説を参照)、出アフリカ以前にさかのぼる現生人類最古の神話層を明らかにするためには、サハラ以南アフリカの神話で、他の地域とくに出アフリカ語の最初期にユーラシア大陸の海岸沿いに移動した人々の神話と一致するモチーフがとくに重要となる。そして人々の移動経路全体 (南アジア、東南アジア、メラネシア、オーストラリア、北・中央・南アメリカ) にその神話モチーフがあれば、独立発生説の可能性も低くなる。

こうした古層共通モチーフとしてベレツインは以下のようなものをあげている。Ⅰ 死の起源、Ⅱ 太陽が捕らえられ、後に解放される、Ⅲ 太陽が自

分の子たちを呑み込む、IV空が杵で突き上げられる、V食べられる空、VI取り戻された銚、VII失敗した塗装。

VIの「取り戻された銚」では、男が別の男から狩猟具か釣具（あるいは魚自体）を借りるが失くしてしまう。所有者は別の品での賠償を断り、失われた品自体の返還を要求する。失くした男は異世界からその品を持ち帰り、たいていは元の所有者に復讐する。ベレツィンはこの神話が西アフリカ、バンツール諸語圏アフリカ、東インドネシア、カピングマランギ島（ミクロネシア・カロリン群島の東南端、住民はポリネシア系）、パプア・ニューギニア（ただし一例のみ）、日本（海幸・山幸）に見られるとしている。インドネシアと日本の場合には、失われた釣り針が異世界である海の住民の病気の原因となるが、それは英雄が釣り針を取り出すことによつてのみ治癒されるという、他の地域にはない新しい要素が共通に認められる点にも注意を喚起している。そしてこの新しい要素は、「取り戻された銚」モチーフが見当たらない北太平洋のシベリアと北アメリカにおいて特徴的なものであることも併せて指摘されている（Berezkin 2007; Berezkin 2008）。

ベレツィンの手法はアールネやトンプソンらに代表される、民間説話研究でのフィンランド学派に伝統的な手法を踏襲しているもので格別目新しいことはない。しかし、コンピューターによって膨大なデータ処理が可能となり、これまで見てきたような他分野での現生人類の動きの再建と重ね合わせることで、個別神話モチーフの古さや分布の示す意味について、実証的・科学的な裏づけを持った解釈が下せるようになってきているといえよう。

日本神話の海幸・山幸における「失われた釣り針」モチーフの場合も、従来の日本神話研究におけるインドネシアやオセアニアの類似例の比較を越えて、世界神話の中に位置づけられるようになってきている。さらにまた、一つの神話の内部でもアフリカ神話にさかのぼる古い部分と、アフリ

カ神話には見られず、インドネシア、シベリア、北アメリカと共通するより新しい、後代に加わった部分とが区別できるという指摘からは、日本神話全体の形成過程についてもこれまでとは異なる見方が出現する可能性も感じられる。

神話研究史の視点から

ある学問分野の研究が他の分野での成果に刺激を受けて新たな展開を見せることは珍しくないし、むしろ当然ともいえる。つまりパラダイムシフトである。19世紀に生物学での進化論が社会進化論の考えを生み、それは歴史学や宗教学や神話学においても考え方の基本となった。20世紀にはマルクス主義、ドイツ・オーストリア民族学派の文化伝播主義、フランス社会学（人類学）、構造主義などの流行があり、それらの考え方に影響を受けた神話研究が行なわれた。今回の世界神話学（World Mythology）という考え方にも、以下のような現代における他領域での学問的成果の影響が強く感じられる。

- ・炭素 14 年代決定のような科学的手法の発達。
- ・コンピューターとインターネットによる世界的規模でのデータの蓄積と公表。
- ・過去の気候変動がかなり詳細に分かってきたこと。
- ・遺伝子学からの人類史再構成。
- ・神経生理学からの神話の普遍性と古さについての科学的仮説の提唱。

こうしたことによって、人文科学も社会科学ももはや科学的データとの整合性を考慮することなしには、自らの学問の独自性を主張することが難しくなっている。これについては、もう少し世俗的な別の言い方をす

ることも可能かも知れない。昨今の成果主義の中で大学においても研究の社会的意味が問われることが多くなっている。従来からある伝統的な学問的分野というだけでは、存在理由について十分に説明責任を果たしていないと批判される可能性がある。どのように社会に貢献できるのか、しているのかを納得的に示すことが予算削減、講座削減から逃れるためにも欠かせなくなってきた。今回紹介した四人が他の学問分野と連動した将来のある新しい神話学を開拓しようとしている背景には、こうした研究を取り巻く環境も影響しているのではないかと感じられる。

ヴィツェルの専門は古代インド文献学だが、それ以外にもかなり広範囲な比較研究に携わっている。もちろんそれは個人的資質にもよるのだろうが、インド学を他の学問分野と連動させることで、孤立化により予算削減の対象となるような事態を避けたいという気持ちもあるのかも知れない（欧米の大学でも人文系の予算削減に伴い、伝統的なインド学の講座が相次いで閉鎖され、昨今話題になっている）。

ハーヴァードにおけるインド学を学際的に位置づける試みは1980年代に始まったらしく、「先史言語研究学会」(Association for the Study of Language in Prehistory, ASLIP) が、遺伝子学 (bio genetics)、古人類学 (paleoanthropology)、考古学、歴史言語学の協同によって、諸古言語と言語起源について学際的研究を進めようという趣旨で1986年に設立されている。「すべての言語は系統的に繋がっており、一つの原言語にさかのぼる。人類の文化もまたそうであろう」という言葉が、1995年から刊行された機関誌『マザー・タング』(Mother Tongue) の創刊号の序文に見られる。この学会で論じられたテーマには、個別古代語の他にノストラディック、オーストリック、オーストロネシアンなどの仮説的言語集団や言語の系統発生の問題などがある。ヴィツェルは当初からのメンバーではないようだが、前述の「比較と再建」という重要な理論的論文は、『マザー・タング』に発表されているし (Witzel 2000 - 2001)、同誌の編集

にも携わっている。人類に共通の言語と文化（神話もここに含まれる）があり、その起源を学際的に解明しようという動きは、すでにこの学会においてははっきりと看取できる。

これと重なるのが、1999年から始まった「南アジアと中央アジアの民族集団形成に関するハーヴァード・ラウンド・テーブル」(Harvard Round Tables on the Ethnogenesis of South and Central Asia)である。これもまた考古学、遺伝子学、言語学、文献学の専門家による学際的プログラムである。第一回のプログラムを見ると、言語学、考古学、文献学、人類学という四つの分野に分かれており、ヴィツェルは言語学、文献学の二分野で9つの発表を行なっている。これは他のメンバーを圧する数であり、ヴィツェルがこのプログラムの中心的存在であることを示している。彼の発表のうち、8つは他のメンバーとの共同発表だが、一つだけ単独での発表が文献学部門のなかでの「比較神話学」である。その後、このプログラムでのヴィツェルの発表テーマには比較神話はしばらく見当たらない。再びテーマとして発表するのは2004年以降となる。そしてこの年以降、比較神話の発表は複数行なわれるようになる。おそらくヴィツェルはこの間に関心を共有するメンバーを集めていたのだろう（後述）。

このラウンド・テーブルはハーヴァードの単独開催から次第に他大学との共同開催になり、また性格もより比較神話中心へと変化していく。第七回では、テーマは「南アジアと中央アジアにおける民族集団形成」と変わらないが、京都大学ならびに地球研との共同開催となり、第八回は北京大学との共同開催で名称も「比較神話学国際会議」と変更された。第八回のエジンバラ大学のテーマはThe Deep History of Storiesだし、第九回のオランダ、ラーフェンシュタインでは国際比較神話学会の成立に伴い、その第二回大会ということになった。ヴィツェルの指導による比較神話学へのシフトは明らかだろう。さらに、ハーヴァード・アジア・センターでは、2003年から2006年にかけて、ヴィツェルが音頭を取ってComparative

Mythology というプロジェクトも行なわれた。これは上記のラウンド・テーブルのうち比較神話研究の分野を特に強化するのに役立ったと思われる。

ファーマーは北カリフォルニアを拠点として複数の学問領域をつなげて新しいタイプの研究を生み出そうとしている比較研究者だが、かつて1980年代には中世後期からルネサンス期にかけての西洋思想史研究者としてルイジアナ州立大学において教鞭をとり、中国学者ジョン・ヘンダーソンとは同僚であった。彼ら二人は、西洋中世と中国という二つの世界において宇宙観や相関的世界理解 (correlative systems) が、直接の影響関係とは考えられない様式で極めて類似している点に注目し、その理由の解明を目指す過程で、西洋と中国の他にインドも比較の対象として加えるべく、インダス文字の問題で交流があったインド学のヴィツェルにも参加を求めたと思われる。ただしファーマーはこれ以前からすでに相関的世界理解を生み出す要因としての神経生理学 (neurobiology) に注目しており、その分野での研究成果もこうした世界各地の伝統的文化における相関的世界理解の類似を生み出す大きな要素としていたので、ファーマー主導で書かれた共同執筆の論文でも神経生理学からの説明が目立つ (Farmer 2006: pp.2, 4; Farmer, Henderson, and Witzel 2000 [2002]; Farmer, Henderson, and Witzel 2002)。

ファーマーとヴィツェルの交流が具体的な論文の形をとるのは2000年からである。最初のテーマは比較神話とは直接関係のないもので、ヒンドゥー至上主義者 (Hindutva) によるインダス文字解読成功という主張の学問的誤謬を指摘した論文であった (Witzel and Farmer 2000)。なお、そこでの主張はその後、ベル研究所に勤務する文字表記の専門家であるリチャード・スプラウトも加わった論文でさらに論証を完全にした形で公表されている (Farmer, Sproat, and Witzel 2004)。

ファーマーはハーヴァード・ラウンド・テーブルには2001年の第三回

から第四回、第五回、そして第七回以降第十回まで参加している。ただし第七回までの発表内容はすべて「インダス文字」に関わるもので、比較神話はまだ登場してきていない²⁾。比較神話がテーマとなるのは第八回のペキン以降である。しかし、すでに述べたようにファーマーは、主として神経生理学の立場から、ヴィツェルの他に中国学者のジョン・B・ヘンダーソンも交えて前近代社会における階層的・相関的世界観についての研究を2000年以前から行なっている。これが最近の比較神話研究と連続していることは明らかだろう。ファーマーはヴィツェルの考えに共感し支持しつつも、神経生理学の成果をもっと取り入れるべきと批判もしている。

ファン・ビンスベルゲンは2004年の第六回のハーヴァード・ラウンド・テーブルにはじめて参加している³⁾。この年からヴィツェルは言語学や考古学よりも比較神話学を中心テーマにしはじめた。同年の27の発表のうち、言語学・考古学のセクションが13で、発生学と比較神話学のセクションが14である。またタイトルに神話 (myth, mythology, mythical, mythological) を含むものは8つだが、それ以外にもシャマニズム、叙事詩、儀礼についての発表を含めれば、12が神話関係となる。そして対象となる神話の地域も明らかに拡大している。比較神話研究の領域拡大のためにサハラ以南のアフリカ神話に詳しいファン・ビンスベルゲンの参加が望まれたのだろう。事実、これ以降、ファン・ビンスベルゲンは2008年まで連続して主要メンバーとして参加している。

ベレツィンはロシア、サンクトペテルスブルグ民族学博物館の教授で、長年にわたって神話モチーフの世界的分布を調べている。ベレツィンは三年前のペキンでの比較神話学国際会議に招かれて以来、このグループの一翼を担う存在となった。彼の世界神話のモチーフについての圧倒的な知識と蓄積データは、理論化の妥当性を検証する上で欠かすことができない。

「世界神話学」という現生人類全体に共通する神話を明らかにしようとする彼らの大胆な試みが妥当なものなのか、そしてもし妥当だとすれば、

四人の考え方のうち共通する部分、相違する部分について、どこが正しいかなどを問うことは、現段階ではまだ困難だし、あまり意味もないだろう。現状では、旧来の神話研究には将来への展望があまり感じられないから、新しいタイプの研究を作り上げようと努力しているという点が評価されるべきだろう。個別の成果の検証は、まだこれから先の作業と思われる。しかし、この方向に新しい比較神話学が進んでいくことは、もちろん大変だろうが（それは一目瞭然だろう）、旧来の専門領域に留まり続けることよりも望ましいに違いない。

一つ危惧を感じるのは、ローラシア神話とゴンドワナ神話の特徴づけである。客観的・学術的な手続きによって示されたそれぞれの特徴だが、ローラシア神話が体系的でゴンドワナ神話が非体系的、体系以前ということで、優劣を感じないのは難しいだろう。19世紀のアーリア人对セム人の宗教・神話の対比を思い出させる。ただその範囲と年代が大きく拡大しているのである。タイプ分けと比較においては必ず起こりうることも知れないが、政治的に悪用されないことを祈るのみである。

注

- 1) 吉田敦彦氏、後藤敏文氏などからの推薦によるものだろう。同様に平藤喜久子、山田仁史の両氏にも接触があり、彼らともども私は翌年のペキンでの国際比較神話学会に参加することになった。
- 2) 第三回、四回、五回、七回の題目は以下の通り。3rd: “Three problems in Indology approached from comparative perspectives: textual layering, the dates of the Vedas, and the Harappan ‘writing’ question”; 4th: “New Proofs of the Non-Linguistic Nature of the Indus Valley Inscriptions”; 5th: “Five Cases of ‘Dubious Writing’ in Indus Inscriptions: Parallels with the Vinca Symbols and Cretan Hieroglyphic Seals”; 7th: with S. A. Weber, T. Barela, R. Sproat, M. Witzel, “Temporal and Regional Variations in the Use of Indus symbols: New Methods for Studying Harappan Civilization”. いずれも「インダス文字」に関わるものである。
- 3) “Long-range mythical continuities across Asia and Africa: Linguistic and iconographic evidence concerning leopard symbolism”.

参照文献

- オープンハイマー、スティーヴン（仲村明子訳）2007：『人類の足跡 10 万年全史』草思社（Oppenheimer, Stephen, *Out of Eden: the peopling of the world*, Constable & Robinson, 2003）
- 海部陽介 2005：『人類がたどってきた道：“文化の多様化”の起源を探る』NHK ブックス
- サイクス、ブライアン 2006a（大野晶子訳）：『イヴの七人の娘たち』ヴィレッジブックス（Sykes, Bryan 2001: *The Seven Daughters of Eve*, Corgi）
- サイクス、ブライアン 2006b（大野晶子訳）：『アダムの呪い』ヴィレッジブックス（Sykes, Bryan 2003: *Adam’s Curse*, Bantam Press）
- ストリンガー、クリストファー＆ロビン・マッキー 2001（河合信和訳）：『出アフリカ 記—人類の起源』岩波書店（Stringer, Christopher & Robin McKie 1996: *African Exodus: The Origins of Modern Humanity*, Henry Holt & Co.）
- 松村一男 1999：『神話学講義』角川書店
- 松村一男 2008：「インド・ヨーロッパ比較神話学における近年の動向」『宗教研究』

355、309-310 頁

松村 2009a: 「インド・ヨーロッパ語族宗教・神話研究の現状とこれからの展望」『宗教研究』359、506-507 頁

松村 2009b: 「世界神話における日月神話—ユーリ・ベレツィンの研究を中心に」篠田知和基編『天空の世界神話』矢坂書房、13-44 頁

リレスフォード、ジョン 2005 (沼尻由起子訳): 『遺伝子で探る人類史』講談社 (Relethford, John H. 2003: *Reflections of Our Past: How Human History is Revealed in Our Genes*, Westview Press)

Berezkin, Yuri 2007: “Out-of-Africa and further along the Coast (African-South Asian-Australian mythological parallels)”, *Cosmos* 23, 3-28.

Berezkin, Yuri 2008: “The emergence of the first people from the underworld: another cosmogonic myth of a possible African origin”, rough draft prepared for the 2nd Annual Conference of the International Association for Comparative Mythology, Ravenstein, the Netherlands, 19-21 August, 2008.

De Vries, Jan 1961: *Forschungsgeschichte der Mythologie*, Orbis Academicus, Freiburg i. Br.

Doty, William G. 2004: *Myth, A Handbook*, The University of Alabama Press.

Dundes, Alan ed. 1988: *The Flood Myth*, University of California Press.

Ellwood, Robert 2008: *Myth: Key Concepts in Religion*, Continuum.

Farmer, Steve 2006: “Neurobiology, Primitive Gods and Textual Traditions: From Myths to Religions and Philosophies”, *Cosmos* 22, 55-119.

Farmer, Steve 2008: “The Neurobiological Origins of Primitive Religion: Implications for Comparative Mythology”, rough draft prepared for the 2nd Annual Conference of the International Association for Comparative Mythology, Ravenstein, the Netherlands, 19-21 August, 2008.

Farmer, Steve 2009: “The Future of Religious Education: Neurobiological, Ecological, Historical, and Computational Approaches to Comparative Mythology and Religion”, lecture given in Tokyo, 2009. see <http://www.safarmer.com/>

Farmer, Steve, John B. Henderson, and Michael Witzel 2000 [2002]: “Neurobiology, Layered Texts, and Correlative Cosmologies: A Cross-Cultural Framework for Premodern History”, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 72, pp.48-90.

Farmer, Steve, John B. Henderson, Michael Witzel, and Peter Robinson 2002: “Computer Models of the Evolution of Premodern Religious, Philosophical, and Cosmological

- Systems”, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, pp.1-11.
- Farmer, Steve, Richard Sproat, and Michael Witzel 2004: “The Collapse of the Indus-Script Thesis: The Myth of a Literate Harappan Civilization”, *Electronic Journal of Vedic Studies* 11-2, pp.19-57.
- Segal, Robert 2004: *Myth: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.
- Van Binsbergen, Wim 1992: *Tears of Rain: Ethnicity and history in central western Zambia*, Kegan Paul International.
- Van Binsbergen, Wim 2006: “Mythological archaeology: Situating sub-Saharan cosmogonic myths within a long-range intercontinental comparative perspective”, in Osada, Toshiki et al. eds., *Proceedings of the Pre-symposium of RIHN and 7th ESCA Harvard-Kyoto Roundtable*, Kyoto, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), pp.319-349.
- Van Binsbergen, Wim, with Mark Isaak 2007: “Transcontinental Mythological Patterns in Prehistory”, *Cosmos* 23, 29-80.
- Van Binsbergen, Wim 2008: “The continuity of African and Eurasian mythologies as seen from the perspective of the Nkoya people of Zambia, South Central Africa”, rough draft prepared for the 2nd Annual Conference of the International Association for Comparative Mythology, Ravenstein, the Netherlands, 19-21 August, 2008.
- Wade, Nicholas 2006: *Before the Dawn: Recovering the Lost History of Our Ancestors*, Penguin Books.
- Witzel, Michael, Steve Farmer 2000: “Horseplay in Harappa: The Indus Valley Decipherment Hoax”, *Frontline* (Oct. 13), pp.4-14.
- Witzel, Michael 2000-2001: “Comparison and Reconstruction: Language and Mythology”, *Mother Tongue* 6, 45-62.
- Witzel, Michael 2005a: “Vala and Iwato: The Myth of the Hidden Sun in India, Japan, and beyond”, *Electronic Journal of Vedic Studies* 12-1, pp.1-69.
- Witzel, Michael 2005b: “Creation Myths”, in Osada, Toshiki et al. eds., *Proceedings of the Pre-symposium of RIHN and 7th ESCA Harvard-Kyoto Roundtable*, Kyoto, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), pp.284-318.
- Witzel, Michael 2007: “Releasing the Sun at Midwinter and Slaying the Dragon at Midsummer: A Laurasian Myth Complex”, *Cosmos* 23, 203-244.
- Witzel, Michael 2008: “Pan-Gaeon Flood Myths: Gondwana myths and beyond”, draft for 2nd Annual Conference International Association for Comparative Mythology, Ravenstein, 19-21 August, 2008.

ヴィツェルの資料は <http://www.people.fas.harvard.edu/~witzel> から、ファーマーの資料は <http://www.safarmer.com/> から、ファン・ピンスベルゲンの資料は <http://www.shikanda.net> から取られている。ベレツインのホームページはないが、上記のように最も重要なモチーフカタログはネット上で見ることができる。